

音楽創作活動における「やりくり」のたとえば ～和音の構成音を生かした旋律づくり～

奥村理恵

鳥取大学附属中学校 音楽科

E-mail: okumura_re@tottori-u.ac.jp

Rie OKUMURA (Tottori University Junior High School) : An example of managing of the creative activity in music classes in junior high schools— melody making exploiting tones that constitute a chord example of managing of the creative activity in music classes in junior high schools.

要旨 — 生徒が思いや意図をもって主体的に音楽表現していくための題材として、「和音の構成音を生かした旋律づくり～掃除時間のBGMをつくろう～」を設定し、その授業を実施した結果を考察した。生徒が創作した旋律は、掃除時間のBGMとして適する特徴をもち、授業後のアンケートからも、読譜力や演奏技能が向上し、音楽表現の理解が深まることが確認できた。本授業を実施した後の合唱授業においても、音楽用語を用いた活発なグループ練習を行う姿が見られたり、音楽記号や音符の長さを共通理解しようとする拡大掲示物を自主的に作成したりするなど、積極的な取り組みが増加した。以上の結果から、音楽の学習において、「自立し、つながり、探究し、創造する力を育成する学校教育の研究」(鳥取大学附属中学校 2018) のポイントに基づいた題材を設定することにより、音楽の学習に対する生徒の取り組みに自発的な姿勢がみられ、深い学びによる音楽表現の向上が期待できることを明らかにした。

キーワード — やりくり、非定型の問題、自主的・創造的な学習、深い学び、旋律創作

Abstract — As materials to make students proactively express music with intentions and emotions, classes were set up and conducted with the theme “Melody making utilizing scales that constitute chords — Let’s compose a BGM for the time of school cleaning”. An analysis of questionnaire conducted after the classes showed that students were able to not only enhance their ability to read music but deepen their understanding on music expression. Students who attended the classes also showed challenging attitude, such as making posters by themselves to understand musical signs or musical notes of different lengths in the choral lessons conducted after the experimental classes. Thus, it was found that materials provided under the theme of the lesson study in Tottori University Junior High School in 2018 “Cultivation of students’ powers to be self-reliant, cooperative, inquiring, and creative” were effective for the improvement of music expression.

Key words — managing, non-standard issues, self-motivating and creative learning, deep learning, melody making

1. はじめに

2015年度より、鳥取大学附属中学校では、「自立し、つながり、探究し、創造する力の育成～『やりくり』のたとえば～」という主題、副題を掲げて研究を進めてきている。これまでの研究によって、問題に対して生徒が自ら思考し、工夫して解決していく授業の重要性について明らかにされている(鳥取大学附属中学校 2018)。

音楽の学習は、音楽活動(歌を歌う、楽器を演奏する、音楽をつくる、音楽を聴く)を通して、

言わばアクティブ(活動的)に学習が行われる。しかし、そのことをもって生徒の「主体的・対話的で深い学び」が実現しているとは言えない。大切なことは、子ども一人ひとりが感性を働かせながら、思考・判断し、表現する一連の過程を大切に学習指導を実践することである。

平成29年7月に告示された中学校学習指導要領音楽編の〔共通事項〕の中では、「①音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ

受しながら、知覚したことと感受したことの関わりについて考えること」、「②音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる用語や記号などについて、音楽における働きと関わらせて理解すること」(文部科学省 2017)、と記されている。学習においては、どのように表現するか試行錯誤したり、楽曲の特徴や、演奏のよさ・美しさは何かなどについて考えたりする活動が不可欠である。

また、平成 29 年学習指導要領では、「音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるよう指導を工夫すること」が配慮事項として示されている。音楽活動は、本来、音を媒体としたコミュニケーションとしての独自の特質をもっている。このことを踏まえたときに、「音楽科の特質に応じた言語活動」とは、表現の学習においては、生徒が実際に音を出して確かめる活動と、言葉でやり取りする活動を関連付けながら行う言語活動であり、鑑賞の学習においては、言葉で伝えたことを実際に音や音楽で確かめたり、対象となる音や音楽を何度も聴き直したりしながら行う言語活動であると考えられる。生徒が、音や音楽によるコミュニケーションと言葉によるコミュニケーションの両方を駆使して、学習を進められるようにすることが大切となる(福島 2017)。

生徒が音や音楽と出会い、音楽を形づくっている要素を知覚・感受しながら、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で音や音楽を捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、文化など関わらせていくこと。このような見方・考え方を、音楽の学習を繰り返す中で豊かなものとし、生涯にわたって音楽を愛好し、音楽に主体的に関わっていくことに有効に働くものとしていきたい(教育課程研究会 2016)。

2. 目的

本研究では音楽表現の向上を目指して「自立し、つながり、探究し、創造する力の育成～『やりくり』のたとえば～」に基づき、生徒が自主的に思考し、工夫して学習するための授業題材として「和音の構成音を生かした旋律づくり」を設定し、その授業を実施した結果を考察する。

3. 研究方法

3.1. 授業題材の条件

本校研究概要に示されているポイントは以下のとおりである。①授業の中で提示する問題やその解法を非定型とする。②問題の最適解について、新たな知識を提示して教え込むのではなく、生徒自身に試行錯誤させて、導き出させる。③生徒が最適解を導き出すための意欲を引き出す環境を整備する(鳥取大学附属中学校 2018)。このポイントを満たすように題材を設定した。

3.2. 題材の設定

まず課題として旋律の創作を設定した。このことにより、授業題材として①②を満足させることになる。旋律は、固定された和音の進行の上に、無数に音の組合せが考えられる。和音進行については、図 1 に示す「カノン／パッヘルベル作曲」の和音進行を用いた。卒業式などでもよく耳にするこの楽曲は、4 小節まとまりの和音が、曲の始めから終わりまで何度も繰り返されるという特徴をもっている。生徒が音楽のつくり手となり、「どの音を選択しどうつなげていくか、どのようなリズムを選択していくか」と試行錯誤する中で、基本となる和音進行が同じでも、選択する音やリズムによって生み出される音楽は様々な表情をもち、限りなく広がっていくという面白さを実感させたいと考えた。

また、③については、本校では掃除時間に、生徒のやる気を喚起させるような BGM が毎日流れている。掃除時間前半にはテンポの速い軽快なポップス曲が、後半にはゆったりとした美しい旋律のクラシック曲が流れている。題材の設定として、日常に関わる機会の多い「掃除時間の BGM づくり」とすることで、生徒にとって創作のイメージが浮かびやすいものと考えた。BGM に活用することをイメージして創作することにより、生活の身近にある音楽を自分たちで創り上げるという目標に向かって主体的に学習に取り組む姿につなげたいと考えた。



図 1. カノンに用いられる和音進行

3.3. 実践の対象及び学習状況

本研究は第2学年の生徒を対象の中心とした。和音や和声の学習については、学級の3分の1程度の生徒が小学校高学年で取り組んできている。中学1年時には、簡単な単旋律の創作に取り組んでいる。今年度からは、授業の初めに簡単なリズム創作やリズム叩きの学習に取り組んできた。創作活動を行うにあたり、音を試す際に使用する楽器の一つであるアルトリコーダーについては、4月から8小節程度の様々な楽曲を演奏してきた。その際、スタッカート・ノンレガート・ポルタート・レガート奏法などのアーティキュレーションについても、楽曲演奏を通して学習してきた。しかし、読譜や記譜については慣れていない生徒が多く、器楽の学習の際にはカタカナで記入した階名のみを見て演奏したり、歌唱の学習の際には楽譜を見ずに日本語の歌詞カードのみを見て歌ったりしている生徒もいる状況であった。

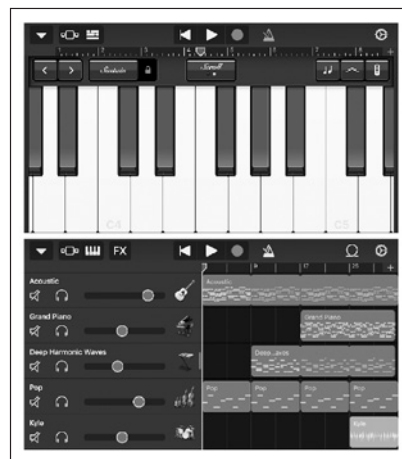


図2. iPadアプリ「Garage Band」



図3. 学習の様子

3.4. 学習環境の整備

創作にあたり、音を試す方法を、アルトリコーダー、4人グループで1つの電子ピアノ、iPadのうちいずれかを自由に使用できるとした。リコーダー演奏を苦手とする生徒に対して、iPadのアプリ「Garage Band」(図2)を用いることにより、演奏技術に依存せず、気軽に音を出して試そうとする意欲を高めることをねらって学習環境を整えた。「Garage Band」では、予め教師が記録しておいた伴奏を自分たちで再生し、何度も聴きながら和音進行に合わせて演奏したり、録音して聴いてみたりすることが可能である。さらに、iPadを用いることで、中間発表の際、Air Dropを使用して、生徒の創作した楽譜写真を学級全体で共有することが可能である(図3)。

3.5. 学習の流れ

第1時：◎カノンの和音進行の雰囲気味わう。

◎様々な音のつながり方を知覚し、旋律の雰囲気の違いを感受する。

①「カノン／パッヘルベル作曲」を鑑賞し、気付いたことを挙げる。

- ②カノンの和音進行を用いて、一つひとつの和音の構成音の中から好きな音を選んで2分音符の長さでつなぎ、個人のワークシートに記入する。
- ③リコーダーで一人4小節のリレー演奏をする。
- ④演奏されたものの中から、なめらかな動きの旋律と上下に激しく跳躍する旋律を抜き出し、音のつながり方に着目してその雰囲気の違いを感じ取るとともに、「順次進行」「跳躍進行」について理解する。
- ⑤参考曲「ひまわりの約束／秦基博作曲」、「春が来た／岡野真一作曲」を鑑賞し、音のつながり方やリズムの反復・変化について知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気感受する。

第2時：◎様々なリズムパターンを当てはめてリズム変奏をし、リズムの違いによる旋律の雰囲気の違いを感受する。

①様々なリズムパターンのワークシートを提示し、リズムに言葉を当てはめ、手拍子をしながら言葉リレーをし、音符の長さやリズムを理解する。

- ②前時に創作した2分音符のみの旋律を活用して、様々なリズムパターンを当てはめてリコーダーで変奏を行う。
- ③掃除時間のBGMを創作するにあたり、どのような曲想がふさわしいか意見交流する。
- ④掃除の前半、後半のBGMのイメージを共有し、ペアで旋律のアイデアを考える。

第3時：◎ペアで旋律を創作する。

- ① i Pad で伴奏を聞きながら、アルトリコーダーや鍵盤楽器で様々な音のつながり方を試し、ワークシートに記入する。
- ②音のつながり方やリズムについてのアイデアを紹介し合い、自分達の作品の工夫に生かす。

第4時：◎中間発表を通して、自分たちの作品を再考する。

- ①これまでの既習事項（図4）を参考にしながら様々な音のつながり方を試し、旋律をつくる。
- ②グループ内で途中経過を発表し合い、相手にもどのような印象を与える旋律になっているかを話し合う。
- ③話し合ったことをもとに、自分の思いや意図に合っているかを、歌ったり楽器で演奏したりしながらあらためて確認し、ワークシートに記入する。
- ④学級全体での中間発表を通して、他グループの工夫点を発見し、自分たちの作品を再考する。

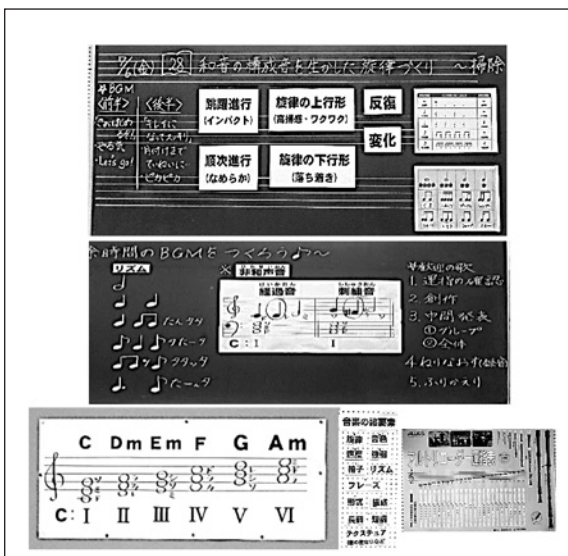


図4. 授業の板書・学習の手立て

第5時：◎作品を録音し、鑑賞する。

- ①各ペアの作品を、i Pad のアプリ「Garage Band」を用いて録音記録する。
- ②他のペアの作品とつなぎ、全体を通して演奏を聴く。気付いたことや感じたことをワークシートに記入し、意見交流する。
- ③学習を振り返り、学んだことを文章にまとめる。



図5. 録音の様子

3.6. 生徒の創作に対する期待

掃除時間のBGMに適した旋律の特徴として、生徒の創作に以下の点を期待した（表1）。

表1. 創作において期待する内容

前半	①跳躍進行を取り入れる（3度以上離れた音への移動）
	②音価の短い音符（16分音符、8分音符、3連符など）の使用
	③弾んだリズム（付点音符など）の使用
後半	④音域幅を広く使い、盛り上がり（上行形）の特徴があること
	①順次進行を取り入れる（となりの音への移動）
	②音価の長い音符（2分音符、4分音符など）の使用
	③落ち着いた（下行形）の特徴があること

4. 結果と考察

4.1. 結果

授業を受けて生徒に記述させたワークシートを、図6～図9に示した。

生徒はペアで旋律のイメージを話し合い、イメージに近付けるにはどのような音のつながり方が良いか試し、ワークシートへの記入を行った（図6）。曲のイメージを持ち、リズムや音のつながり方、構成、さらには楽器で演奏する際の音のイメージについても、スラー、スタッカートなどの音楽記号を使用して記入できていた。

和音の構成音を生かした旋律づくり ～ 掃除時間のBGMをつくらうか～

1. 目的：掃除時間のイメージ・描写
 2. 和音のイメージ（イメージ）
 3. 掃除をつくるリズム
 4. リズム アイデアスケッチ
 5. 全パートの演奏
 6. 全パートの演奏

生徒のワークシートには、和音の構成音を生かした旋律づくりの目的、イメージ、リズム、アイデアスケッチ、全パートの演奏の欄があり、生徒の記入内容が確認できる。

図 6. ワークシート（段階的なイメージの明確化）

図 8. 掃除前半をイメージした旋律

図 9. 掃除後半をイメージした旋律

和音の構成音を生かした旋律づくり ～ 掃除時間のBGMをつくらうか～

1. 目的：掃除時間のイメージ・描写
 2. 和音のイメージ（イメージ）
 3. 掃除をつくるリズム
 4. リズム アイデアスケッチ
 5. 全パートの演奏
 6. 全パートの演奏

生徒のワークシートには、和音の構成音を生かした旋律づくりの目的、イメージ、リズム、アイデアスケッチ、全パートの演奏の欄があり、生徒の記入内容が確認できる。

図 7. ワークシート（作品イメージの言語化）

図 7 に示すワークシートに記入した生徒は、リズムの反復や変化についても思考・分析し、根拠を持って作品のイメージを伝えようとしている。中間発表を通して、使用する音を変更した様子も読み取れる。

他のペアでは、リズムアイデアスケッチの欄に音符を記入した後、音符の上に当てはまる言葉を書き入れて発音しながらリズムを確認し、確実にリズムを把握しようとしたり、音符の下に分数や小数を記入して、4分の4拍子1小節の中には4分音符が4つ分入るということを、計算しながら正確に記入しようとしたりするペアの姿も見られた。

図 8 に示す掃除前半をイメージした作品を分析すると、図中①の部分では、音が大きく跳躍している。さらに、スタッカートも書き記されており、楽器で演奏する際の音のイメージについても考えることができています。4小節を通して3連符の細かい音の動きが多く使用されている。音域が広く使用しており、後半に向かって上行形で盛り上がる。これらの特徴が、聴く人にインパクトを与える。図中②の部分では、連続した16分音符の使用と跳躍した8分音符・16分音符の使用、さらに、リズムの反復使用により、にぎやか

な音の動きが表現されている。図中③の部分では、付点8分音符・16分音符を使った弾んだリズムが使用されている。図中④の部分では、1オクターブ以上の音域を広く使い、最後に向かって旋律が上行し、盛り上がっていくという特徴が見られる。

図9に示す掃除後半をイメージした作品を分析すると、図中①の部分では、順次進行下行形の音の動きの特徴が見られる。図中②の部分では、4分音符・2分音符など、音価の長い音符が使用されている。音域幅も狭く、穏やかな音の動きとなっている。図中③の部分では、低めの音域が使用されている。図中④の部分では、終わりに向かって旋律が下行し、落ち着いて終わる印象を与えている。

作品の中間発表の際には、曲のイメージと、イメージを表現するために行った創作の工夫について言葉で説明してから演奏を行った。聴く側も、どのようなことが感じ取れたか、良さは何かという点について伝えることができていた。中間発表を通しての気付きや改善点について、ペアやグループで話し合うことができた。

4.2. 考察

授業後のアンケートの記述内容を、図10～図12に示した。

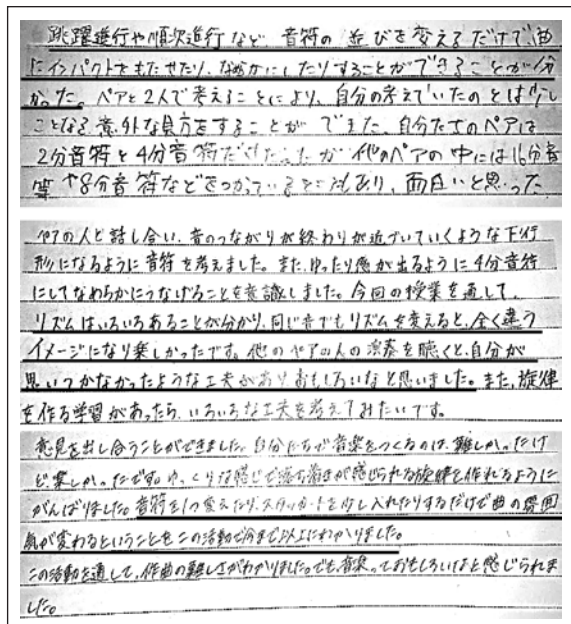


図10. アンケートの記述（音のつながり方やリズム、奏法による旋律の雰囲気への影響について）

図10に示すアンケートの記述では、音のつながり方やリズムの違いにより、旋律の雰囲気が変わるということや、その面白さへの気付きについて記入されている。また、旋律を演奏する際、スタッカートやテヌートなどの奏法を取り入れることで、演奏表現に違いが生まれることへの気付きも記入されている。

図11に示すアンケートの記述では、記譜や読譜を苦手としていた生徒が、今回の活動を通して音符や楽譜についての理解を深め、自分の力で楽譜を読んでリズムを理解して演奏することができた、という点について記入されている。さらに、リコーダーの演奏技能について、それま

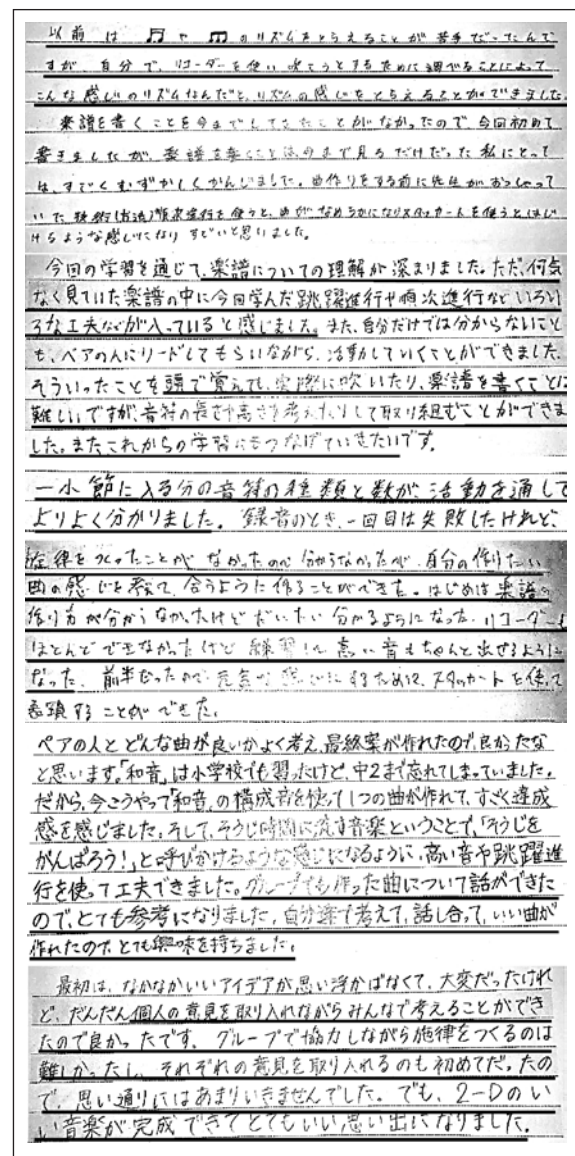


図11. アンケートの記述（楽譜や読譜、リコーダーの演奏技能について）

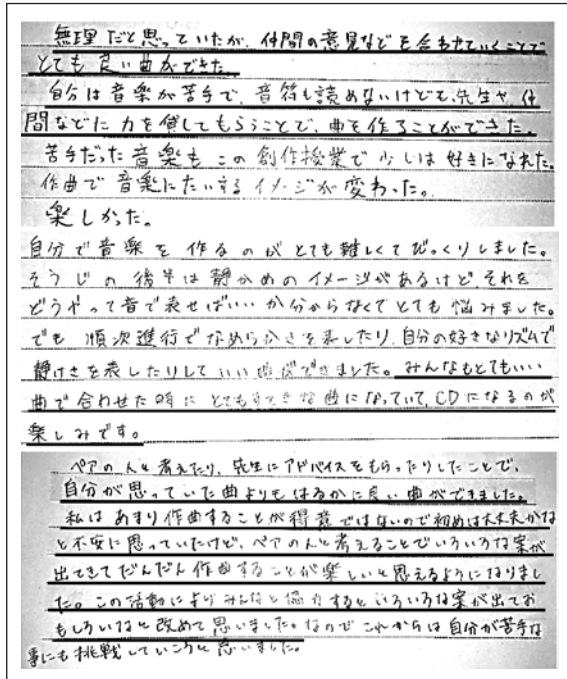


図 12. アンケートの記述（ペア活動やグループ活動について）

で自信のなかった生徒が、創作活動を通して上達を感じた様子が読み取れる。

図 12 に示すアンケートの記述では、それまで創作の経験が乏しく自信のなかった生徒も、ペアやグループの仲間との学び合いにより、作品を完成させることができたこと、さらに、学級全体で一つの音楽を創りあげることができたことへの達成感や喜びについて記入されている。

ペアでの創作活動であったが、学習のはじめから 4 人グループの座席としたことで、それぞれがアイデアを出しつつ苦手な点を確かめ合い、学習に取り組むことができていた。記譜については、既習曲楽譜やワークシートを見ながら、音符の棒の長さやはたの向き、1 小節に入る音符の数について自分たちで確認し、記録することができていた。5 線譜に音符を「書く」活動により、より音符や楽譜についての理解が深まったことが確認できた。

教師の支援としては、ワークシートへの記入の順番を、①曲のイメージ→②イメージを表現するために取り入れたい工夫→③基本となる 2 分音符の音選び→④リズムアイデアスケッチ→⑤旋律の記譜（図 6）とし、段階的にイメージを明確化させたことで、音楽経験が豊富な生徒や、

経験が乏しく不安感を持つ生徒等、どの生徒にとっても創作の手順が分かりやすいものとなるよう努めることができた。また、i Pad の活用により、できあがった作品を、生徒自身が納得のいくまで録音記録を繰り返し、学級で一つの楽曲につなげて学習の最後に鑑賞を行うことができたことで、生徒の達成感、音楽に対する関心をさらに高めることができた。

授業の後に行った定期テストでは、授業で扱ったものと同じ和音進行で、2 分音符のみを使用した旋律創作課題に取り組みせ、個→ペア→全体の学びで身に付いた創作の力や記譜の力が、個ではどのくらい身に付いているかを図り、個の学びへと返すことができるようにした。

「新学習指導要領の展開」（福島 2017）によると、創作の学習で大切にしなければならないポイントは次の 3 点である。①あらかじめ、作りたい作品のイメージをもたせておくこと、②自分が出した音にしっかりと意識をもたせること、③創作活動に取り組むことの楽しさや喜びを味わわせること。今回の学習では、これら 3 点について満足させる学習活動を行うことができた。

4.3. 授業を受けた後の生徒の音楽への取り組み姿勢の変化

本授業を実施した後の合唱授業においても、パート練習の中で音楽用語を用いて活発に意見交換し、音符の長さや作曲者の意図等を知覚し、楽曲の雰囲気を感じて、それらの関わりを考えて楽曲を深く理解し、音楽表現を高めようとする姿が見られた。また、クラス全体で合唱曲の音楽記号や音符の長さを共通理解しようとする拡大掲示物を自主的に作成する姿も多く見られ、音楽表現の向上に対する積極的な取り組みが増加した（図 13）。



図 13. 合唱練習の様子

器楽の学習においては、これまで楽譜に必ずカタカナで階名を記入してから演奏に取り組んでいた生徒が、何も書かずとも楽譜を読み、演奏しようとする等、読譜力の向上した姿が見られた。

以上の結果から、音楽の学習において、「自立し、つながり、探究し、創造する力を育成する学校教育の研究」（鳥取大学附属中学校 2018）のポイントに基づいた題材を設定することにより、音楽の学習に対する生徒の取り組みに自発的な姿勢がみられ、深い学びによる音楽表現の向上が期待できることを明らかにした。

5. 今後の課題

今回の学習では、ペアで創作した旋律を教師が並べ替え、一つの楽曲にして再生・鑑賞を行ったが、音楽の構成等にも視点をおき、まとまりのある音楽について考えていける学習にも今後取り組んでいきたい。また、教え合い活動を通してどの生徒も記譜を行うことができたが、正確さに欠ける部分もあるので、評価基準も含めて検討し、録音したり図や言葉で表したりするなど、記譜にこだわらずとも誰でも創作活動に気軽に取り組めるような工夫についても考えていき

たい。また、ペアでの創作活動は、互いの苦手なことを補い合える反面、音楽経験の豊かな生徒同士にとって、互いのアイデアや意見を合意形成し一つの作品に仕上げるといった創作の手順にやりにくさを感じた様子も見られた。ペアの組み方や学びのスタイルについても今後考えていきたい。

今回は生活の中の身近な音楽を自分たちで考える活動に取り組むことができたので、来年度以降は地域に密着し、発信できるような活動に取り組んでいきたいと考えている。

文献

- 福島和久（2017）平成 29 年度版 中学校新学習指導要領の展開 音楽編．明治図書出版．15pp. 114-115pp.
- 教育課程研究会（2016）「アクティブ・ラーニング」を考える．東洋館出版社．180-181pp.
- 中尾尊洋（2018）平成 29 年度鳥取大学附属中学校研究紀要「自立し、つながり、探求し、創造する力を育成する学校教育の研究」．5-15pp.
- 文部科学省（2017）中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編．文部科学省